

## メルツァー提唱：「アトリエ・システム」・自主改革案（1971）

ご承知のとおり、カリキュラム委員会(The Curriculum Committee)は、ここ何年来、訓練生の教科課程コースの見直し、及び教師陣スタッフの新しい組織改革を検討してきたわけですが、ようやくその結果が出たようでありますので、ここでそれについて幾らか吟味を重ね、フィードバックを試みながら、今後のさらなる発展についても語ってみたいと思います。こうした状況において、討議を重ねる中で問題と思われましたのは、基本的なところでわれわれはその教育システムの‘永続化’を当然のことと見做していることが鮮明に浮き彫りになっていることであります。しかしながら、そのように窮屈に考えるのはどうかと思われまます。おそらく何事も不朽不滅というわけにはゆかないわけですし、そこに疑問の余地がまるでないわけでもありませんから、時に応じてシステムそのものの再検討が必要とされるのは必定かと思われまます。精神分析といった‘小宇宙’をめぐってのわれわれの関心ごとに限ってみるまでもなく、もっとより広い世界に向かってわれわれがそれを理解しようとするとき、その直接的経験およびそこに生じる葛藤から輩出される諸々の考えおよび見解といったことからしましても、そうした論議は殊更に特別視されるものとも言えませんでしよう。それらは誰にとっても一般的な関心ごとと見做していいかと思われまます。こうした理由から、これまでに私が折々に語ってまいりました幾つかの事柄について「the Scientific Bulletin」誌上において会員の皆さま方にもご覧いただけるように、Dr. Klauberからの執筆依頼を承諾した次第であります。

これから述べます見解は、私が過去において書いたり語ったりしてきた幾つかの他の事柄にも密接に関連しております。すなわち、精神分析とは本来何であるのか、そこに於いて「教えるということ」そして「学びが促進してゆくこと」の間の差違、今や精神分析にも認められるヒエラルキー的な階級組織といった構造的力動性、そしてわれわれと抜き差しがたく結び付いているコミュニティーとわれわれ実践活動との関わり、そういった考慮すべき事柄にも大いに連動してまいります。こうした四つの項目を念頭に、われわれが擁護しておりますところのシステム、特にはその旧式でかつ誤謬に満ちた側面について、私としては論議したいと思っております。どちらかといえば、むしろそれらを詳細に描写し、かつそれがどういったものか評価・査定を試みたいわけなのです。その上でさらに私は、それとは別の一つの代替案となるシステムについて語りましょう。この時点において、幾らか苛立ちを禁じ得ないといったことになるかも知れません。そして、こうお尋ねになるでしょう。〈なぜ、システムについて、その普遍性やら、抽象理念やらにいちいちこだわる必要があるのか。今現在機能しているシステムがあり、いずれ時の流れに従うなかで、それがさらに少しずつ変化してゆけばそれでいいのではないかと。確かにその通り。そうしたふうに、カリキュラム委員会の皆さま方にしてみれば、極めて楽観的にお考えであつたろうと思われまます。一旦訓練コースに関心が集まり、やがて修正へと導かれるであろうと…。しかしながら、状況はもっと複雑です。そこで必要とされる事実とは何かをどう規定すればいいのか、そしてそれらを訓練生および教官たちからどう聞き出せばいいのか、それには大きな困難が想定されます。コミュニケーションも、批判も、どちらにしても事柄は実に微妙でありますし、どんな討議にしろ、「今ここにいる仲間を締め出す」といった雰囲気を選びざるを得ない、そうした傾きがあることは否定できません。これら総

てが、そして何よりも時間が途方もなく消耗されることを考えますと、確かにわれわれの悲観はとことん底無しといった感がうかがわれるのであります。

そのうえ、現行のシステムというのは医学的背景があり、またその中世風な伝統を伴っているわけですから、ごく自然なところでわれわれをそうした方向へと傾斜しがちであります。それは教育の或る一つの様式といえましょう。すなわち理論と実践を別々なものとして教えるということであり、いふならば階段式講義室と病棟は別々に仕切られているわけであります。つまりのところ、患者を経験すること、すなわち目の前の患者が直接的に理解されたりもしくは通じ合えるものになる前にということですが、必然的に予め習得されねばならない学問的知識及び専門語の体系があるということが前提になっているのであります。しかし勿論事実として、われわれは非医師の方たちをも訓練しているわけですし、そして誰もが承知していることとして敢えてここで申し上げれば、英文学の学位というものが、面接室で患者と共にするに先立ってその下地をつくるのには、医学の学位などよりもはるかに有益かつ有意味であることが挙げられます。すなわちこれなどは、われわれにとって暗黙に前提とされておりますことを明らかにわれわれ自身がまるで信じていないことを示しております。システムの構造、それは年功序列といったことに強調点があり、そこでは学問的研究(リサーチ)の業績に指導性の能力そのものが意味されており、臨床的实践そして臨床的研究との間にはパラドクシカルな相違があることについてもなのですが、その身分の保有権は、個々の能力およびその関心の移り変わりなど何ら顧みられることはないわけですし、そういうわけで何ら揺るぎないものとして維持されてゆくわけであります。その点からして、こうしたシステムの構造とは、まさしくそこで基準となることながら同業者の結束を固めることであるといった「技能集団(ギルド/a craft guild)」に相応しいものということになりましょう。医学は、一般的に申しまして、その組織体においてこのレベルを超えるものではありません。しかしこの過去百年の驚くべき科学的進歩がゆえに、そうした治療的能力を誇示する事実上の独占権(monopoly)を商売敵である他の業種に譲らざるを得ない事態に至ったといえましょう。薬屋(註:もと医療も行った)、理容師、整骨医、指圧師、ホメオパシー医、占い師とか妖術師とか…。しかしながら、精神分析は、そのような不合理で旧式な組織体に加わって独占権を有するといった位置づけにはありません。われわれが自分たちを医学の亜種ともいえる専門職であるといったふうに考えているとして、そして、われわれが嘘偽りなくそのようなものとして考えていいものやら私自身としては全然確信が持てないわけですが、世間一般がわれわれをどう見ているかといえば、おそらく寛大な見方からすれば、理知的な規律(an intellectual discipline)を擁護して結束する頭脳集団みたいな何かとして認知してくれているともいえましょうし、もしくはちょっと意地悪な見方からすれば、何らかの信条(a system of beliefs)を有し、しかも人々に悔い改め(転向)をもたらさんとする(convert creation)、何とも実に金の掛かる方法を標榜する‘宗派(セクト)’として捉えられているのではないでしょうか。

こうしたことを考慮に入れますと、そこから論議すべき点は多々あるかと思われまします。われわれには伝授できるような明確な学術体系といったものの持ち合わせがありますかどうか？ パーソナル・アナリシスは精神分析的方法を学ぶことにどのように関連づけられて然るべきか、それを判断し得る基準

(standards)とは果たして何であるのか？われわれは、精神分析学徒なる者たちの成長を本来目的とすべきではないのか、言い換えれば、個人として各自銘々が自らのあり様(his own way)を探し出すこと、そしてそのために、その精神分析的方法そして理論を彼独自に活用するといったことが許されていいのではありませんか？この場合、基準は果たして規定されたり査定されたりなど可能でありましょうか？むしろこう思われます。ここでクロス・カントリー競技といったことが念頭にあるのですが、そこではごく自然に起こりうる障害に出くわすたびに、各自銘々が独自に対処しなくてはなりませんから、自己評価(self-evaluation)そして自己決定が促進させられるといったことがありますわけで、そうしたモデルからも想定されますように、ここで「学びのフィールド a field of study」の構築を模索してみてもどうでしょうか？システム上に於いて身分、権限、そして決定権をめぐるのヒエラルキー的構造は果たして必要なのでしょうか、現実味がある(リアリステック)といえるでしょうか？或いは、どの履修コース、それにどの教官にするのかといったことにしても、人々がそれぞれ自由に選別をし、自らの関心を追究してゆくことが許されるといったことは可能でしょうか？訓練生と教官との間に歴然とした差別・区別を設け、そこに単なる個人的(personal)な意味合い以上の形式的(formal)なそれを加味することは必要なのでしょうか、もっと言えばそれは果たして望ましいことでしょうか？‘精神分析家’というタイトルを統制すること、もしくはその技法をめぐる独占権に致しましても、そのどちらにもその可能性(見込み)など何らあるとは思えないわけでして、そうでありますから、精神分析運動を維持する一つの手段として、指導者層に有利なように追随し、その結果われわれは‘純血種’であるといった期待感(a hope of purity)を保とうとすることを、この際放棄することが必要ではないでしょうか？

究極のところ、精神分析家の経済的および社会的な生存能力(viability)の現実とは何かが問われることになろうかと思われます。まず彼は患者を持たねばならないでしょう。仲間・同僚も要るでしょう。もし彼が教えることを望むならば、学生が要るということになりますし、もし研究成果を公表したいということならば、それに耳を傾けてくれる誰か聴衆が要るでしょう。もし彼がさらに成長したいならば、学びの環境が必要になりましょう。もし彼が生き残ろうとするならば、サポートとそれなりの生活の資が要るでしょう。今日われわれのシステムにおける公認の資格と実際的な意味での生存能力との間に現実的と言えるような関係性はあるのでしょうか？私には、とてもそうは思えないのです。公式的な(註：タテマエ)構造と実際のそれとの間には著しい格差(不平等)があるといったふうに見えるのです。そこでは前者の機能は、まず何よりも第一義的に‘神話’として機能しているということが挙げられます。その神話が、パーソナルな接触、プライベートな意見、そしてパブリックな(社会一般の)世評を基盤としたところのリアルなシステムの自由な活動および発展を妨げているように思われます。勿論のこと、私はここで、事実上ギルド・システムの制約下に縛られたままでアトリエ・システムを設立することは、結果的に混乱を募らせるでしょうし、予想もつかない非現実的な責任を負わされることにもなり、またそれまで潜在していた圧制(tyranny)が頭を擡げることにもなるでしょうし、そして‘宗派分立’といった傾向が助長されるといったことを、示唆していることとなります。

上記した組織体と機能の間に生じる‘ずれ(dislocation)’からもたらされる4つの副産物のなかでも取り分けて選別と査定をめぐる‘権限’といった非現実性が当事者の誰にとっても精神的な侵蝕性を免れない最大の躓きになろうかと考えられます。私自身の経験からして、こうした側面は殆ど皆さんの方にもひどく忌み嫌われていると言わざるを得ません。何故かと申しますに、それが結果的に訓練生を‘被告人(defendant)’の立場に立たせることになるからです。志を抱く人(aspirant)というよりも…。そして教官を‘迫害者(persecutor)’の立場に立たせるといったことにもなるからです。仲間・同僚というよりも…。それで委員会のメンバーは、エリートの儀式用服装に身を包みますし、威風堂々たる殿堂がこうして暗黙裡に‘異端審問’の場になることが懸念されるわけであります。

そうであればこそ、こうした悪夢へと膨れ上がってゆく事態をどうにか食い止められる、一つの代替案としての「アトリエ・システム」とはどういったものなのでしょう？私としましては、まずはそれを第一に‘場所’<sup>まかな</sup>として考えたいわけなのです。それは市(market)には市場(market-place)がいるように…。ラファエルの絵画作品「アテネの学堂」が念頭に浮かんでまいります。そこでは、教えるべく何かを有する誰かがいて、また学びたいと望む誰かがいて、そうした双方が共に集うところの場所であります。つまり、そのようなものとして私は「アトリエ」を考えたいのです。そこでは資格を授与されることなどまるで必要とされません。希望者の誰もがいちいち応募する手間も要りません。制限も一切ありません。それはソサエティーもしくはクリニックといった構造の外部にあるものです。そして皆がごく僅かな料金を出し合うことでその場所は賄われてゆくといったこととなります。経験のある人々のなかから、そこでチューターもしくはスーパーヴァイザーとして手助けをしたいと名乗りをあげる者が現れるかとも思われます。興味のあるジャンルについて別途コースを開くのもいいでしょうし、セミナーでもいいでしょうし、リサーチやらもしくは研究グループといったものが組織されてゆくのもいいでしょう。これらはその旨告知され、そしてそれに応募したい者が名前をただ登録するだけ、それから教師によってパーソナルに選別の手続きが取られるだけでいいのです。アトリエは、念のために参加者の受講履歴の記録を保持することもあるでしょう。将来それらの事実が、いずれ各自が就職する際に、ソサエティーに入会する時にも、分析を受けたいと希望する将来の患者らにも、情報として提供されるためにであります。ここで人々から徴収される料金に関して申しますと、アトリエは銀行業務的機能をも遂行することになりましょう。それは、集会のために部屋を貸す業務も求められるでしょうし、他にも社会的機能をまっとうする上でさまざまに準備を怠らないためにも、そしてそれ自身の運営が円滑に維持されてゆくためにも…。それが実現可能となるためには、世話人たちの熱意が最大限に問われますし、たとえ混乱やら無秩序が生じるにしても忍耐が試されることが極力少なくてすむであろうことが見込まれます。このシステムでは、学生側にも、もしくは教官側にしてもパーソナル・アナリシスの経験が有るか否かはまったくのところ考慮に入れられておりません。

さて最後に、ここで話を終えるにあたって、一つ疑問が投げかけられるでしょう。「精神分析のアトリエ」、それに「精神分析のインスティテュート」は、互いにそれぞれ排他的で両立し得ないものであるべきといったことに何か理由はあるのかと…。確かに、私はまたこんなふうにも考えられるのではなかろうか

と思うのです。つまりそれら両者は互いに援助し合い、従って共存し合うものでもあるということです。学生たちには自ら選別する機会がさまざまに与えられるということでもあり、教えること・教えられることの熱意にいい意味で‘はけ口’が求められるといったこと、インスティテュートの訓練プログラムのためにもアトリエが訓練的でかつ意義あるものとして証明される根拠になるのではないかということ。そして、精神分析を学びたいと願いながらも、将来その臨床実践に携わることを必ずしも熱望しているわけではない多くの人々にとって門戸が開かれ、取り敢えずアトリエがそのために用意された設備であるといったふうに・・。そのように信じていい理由は私には十分あると思われる次第です。

\*\*\*\*\*

※註;原題は「Towards an atelier system」。「the Scientific Bulletin of the British Psycho-Analytical Society,1971 に掲載されたもの。後に、『Sincerity and other works –Collected Papers of Donald Meltzer』 edited by Alberto Harn, Karnac Books, 1994 の第13章に再録された(p.285-289)。その巻頭には、監修者による註解が記されている。下記のとおりである。

このメルツァーの論文は、当初British Psycho-Analytical Societyの会員たちに回覧されるために書かれたものであり、そこにはInstitute of Psycho-Analysisの訓練生(candidates)の選抜、トレーニング、及び資格化について或る批判的見解が提示されている。ソサエティー‘公認’のトレーニングと並行して、それとは別個にもっと権威的ではないセッティングで精神分析を教えるなり学ぶといった組織体(an organization)があってもいいのではないかと示唆したことになるが、このことでメルツァーは精神分析的‘エスタブリッシュメント(establishment)’から歓迎されるどころか、むしろその見解は1971年に於いては些か‘破壊活動分子的’と見做された。彼らは、精神分析家たちの関心がソサエティーから、また既存の理論やら教義からも逸脱してゆくことになりはしないかと大いに恐れたわけで、このことがメルツァーとエスタブリッシュメントとの間に修復し難い亀裂を招くに至った。 (訳;山上)

\*\*\*\*\*

## 【訳者あとがき】

山上 千鶴子

メルツァーのことを、或る誰かが‘理想主義者 idealist’だと言っていた。それを‘夢想家 dreamer’とも言い換えることができよう。下手すれば、夢想は‘妄想’になるやもしれない。ベティ・ジョセフが<・・・メルツァーはパラノイアです>と語ったとか。そのように松木邦裕氏が証言している。〔※参照;メルツァー著『クライン派の発展』、金剛出版 2015, P.6〕私などは、何とまあ、かの頭脳明晰でハートのあるベティ・ジョセフが・・と驚きを禁じえないわけだが。おそらくは、この論文「Towards an ateli

er system」のインパクトがそれほど衝撃的であったのだろうと、訳しながらそれを改めて思った。実にエスタブリッシュメントの面々を驚愕させるには十分なものといえる。その心情をちょっと覗いてみるに、吐き捨てたいほどの嫌悪感がうかがわれる。メルツァーを‘破壊活動分子’扱いたしたというもなるほどといった感じ。しかしながら、これを単なる妄想と退けるのではなく、そこに一緒に考えてゆく姿勢が双方に求められたはず。惜しい！平行線で噛みあわず、結局相互にしこりが残った。しかし、さもありなん！メルツァーは、インスティテュートの精神分析をめぐる‘独占資本化’を猛烈に突いている。それが誰の利益を優先しているのか、勿論既存体制に与する人たちである。この保守がらみの体制は必要悪か、それともそこに幾らかでも信義はあるのか。メルツァーは問うている。我国では1947年に「独占禁止法」なるものが制定されたが、どうやらその趣旨において一脈通じる論法であるとも思われる。‘市場’を開放せよということ。そこで公正・自由な競争が維持され、‘消費者’の利益やその健全な発展を確保することが目的とされるというわけ。ただ思うに、われわれ精神分析学徒は‘消費者’に過ぎないとは決して言い難い。この点が、メルツァーの大いに苦慮するところであろう。確かに、その論旨が明快とはゆかない。

本来この種の論文を訳するのは、私の任ではない。ともかくあちらの事情に疎い。あちらのソサエティもインスティテュートも、その実態については無知である。それどころか、私は帰国後、終始一貫「日本精神分析学会」とは距離を取ってきたし、貢献度はゼロである。「協会」なるものについても同様。それらの擁護する認定制度についてはまったく無関心であり、無知も甚だしい。私は‘組織の人’ではない。‘単独者’である。論評する資格に欠ける。ただ振り返って、なぜ自分がこうしたスタンスを取るに至ったのか、殊更メルツァーに影響されたとは考えていなかった。ただ自分が臆病な気質でどうも人と群れるのは苦手だからと内心思っていた。でもどうやらそれとも違うようだ。私もまた密かに夢想していたのだろう。そして、どこか彼の夢想を単に妄想と退けることのできない、その精神分析への思いに於いて深く共鳴を覚えるところがある。この論文が彼の論文集から削除されていないのは、おそらくこれが白紙撤回されたのではないということだろう。今や誰にも顧みられないにしろ、遠い過去において物議を醸した論文として軽く却下されるだけでは惜しい。あまりにも重い根本的課題を彼は突きつけているのだから…。それにしても、ここには彼自身の‘経験’が充分克明に描写されてはいない。別の或るところで彼はこんなふうに語っている。イギリスを訪れた当初、メラニー・クラインにしろThe British Psychoanalytical Societyにしろ、従順さ(obedience)が期待されるとか、要求されたりなどは全然なかった。ところがやがて徐々にインスティテューションは不寛容になり、権威付けがきつくなってきて、全然おもしろくなくなっていった(less tolerant, more authoritarian, and less interesting)と…。どういうことなのかしら。そしてアトリエ・システムなるものの青写真が今一つ言葉を尽くして語られているとは言い難い。実に惜しい！

その空隙を果たして埋められるかどうか心もとないが、ともかく私の経験を踏まえて、ここに連想の糸を手繰り寄せてみようと思う。一つ、われわれ精神分析家というのは技能集団(ギルド)だということ。そこで伝統が維持されてゆく。その伝統を担う、継承してゆく。それが「徒弟制度」となる。それも確か

だろう。昔ながらの鍛冶屋とか染物屋などの場合を想像するに、そこでの技能習得というのは分かりやすい。親方から必死になって技術を‘盗む’。何年か経てやがてその腕が認められ、弟子は‘のれん分け’をしてもらって独立する。その後はそれで一生食べてゆける。これは公正な取引(fair-deal/フェア・デール)といえよう。精神分析は、これとそっくり同じとはゆかない。これで一生飯を食ってゆけるといった将来の保証など断じてありはしない。それを云々するなら、‘詐欺’になろう。この意味で、たとえ市場が開放されたとしても、その先に未来はない。肝腎なことは、メルツァーというところの「アトリエ・システム」には、パーソナル・アナリシスの位置づけが敢えて抜け落ちていることが問題だ。敢えて考慮されていないと、そこには明記されているのだ。要らないものにされている？！ エスタブリッシュメントから心情的に反駁されたのは、まずはそこにあると思う。それこそが精神分析の伝統の‘生命線’なのだから。実際のところ、それは彼らにとって日々の‘収入源’なのだから、それを奪われるとしたら死活問題となろう。でもそれはそれとして、教えたい者がいて、教えられたい者がいる。なぜ市場は開放されないのかと問うメルツァーだが、それも一理あろう。でも、ここに彼の盲点があると思われる。

パーソナル・アナリシスとは何か。それは「契約関係」だということに尽きる。それは自主フォーラムとかカルチャーセンターでは所詮無理だろう。二者双方のコミットメントが問われる関係性なのだ。その意味でどちらもが‘倫理的存在’としてあることが前提になる。‘契り’<sup>ちぎ</sup>といったこと。飽くまでもパーソナル・マター(personal matters/自分ごと)を突き詰めてゆくこと。身を委ねる、そして引き受けるといったこと。ヘブライ的(旧約聖書的)に言うならば、‘呼ぶ・呼ばれる関係性’とも言い換えられる。それ無しには、精神分析は腑抜けたものになろう。この倫理的な‘契り’の感覚なしに、その内的縛り<sup>しば</sup>を度外視するならば精神分析はもはや‘危うい’といわざるを得ない。メルツァーは知的誠実(sincerity)を重視する向きがある。「アトリエ・システム」が果たしてそれを守り抜くことができるかどうか。私には責任持てません！ としか言いようがない。彼が怖がっていないことが私にはむしろ不安だ。

メルツァーはメラニー・クラインに分析を受けていた。その経験について否定的な印象は見当たらない。どちらかという、不本意なかたちで打ち切りになってしまったことを口惜しく、情けなく、寂しく思っていたように思われる。けれど、彼はどこかで「パーソナル・アナリシスからの回復」ということをも語っている。何だろう？ おそらく誰かに依存するという長年の習癖、それを‘トラウマ’と捉え、そこからの脱却を促す。独立路線へ向けて、まるで檄<sup>げき</sup>を飛ばしているかのように。。それで、それぞれ訓練生にはアナリシス終了後、不定期に会い、各自が語る己の夢分析について耳を傾けていたようだ。その場合、彼は飽くまでも‘同伴者’といったスタンスを取っている。或る意味、それがメルツァー流の「アトリエ・システム」、その夢の延長上にあつたといえなくもない。組織に身を置く限り、権力ある者に追従し、適応といった‘殻’のなかに窮屈に身を縮こませているしかない、そうした或る意味‘小賢しいのち’を見るに忍びなかった。我慢できなかったのだろう。その殻をぶち破って、そのいのちに手を差し伸べたいと彼は心底願ったものと思われる。経験・年齢の差を超えて、肩書なども捨てて。。ただの‘親なるもの’に徹するということではなからうか。ふと私は思う。かつて彼には三人の息子たちがいた。ケイティ、ジョナサン、そしてマイケル。父親メルツァーは実に献身的で精力的。テニスにそして乗馬と一緒に汗をかく。美術

館・博物館巡りにも彼らを伴ってしばしば出掛ける。彼の嗜好のあれやこれやそのすべて、音楽やらダンス好きもそう、そして馬の飼育に熱中し、樹木を愛し、園芸にも精を出すといったこと。それらがそっくり息子たちに受け継がれている。見事に！彼の訓練生との関わりには、かつての息子たちとのそうしたケアフリーな交流が彷彿とする。何の差別・区別もない、「語らい」と「分かち合い」のスピリット。それを彼は希求していたのだろうか。その自由闊達さ(unconfined)、それを規律で縛られた窮屈な(confined)エスタブリッシュメントの面々はむしろ警戒したのだと想像されよう。

タヴィストックの先輩のミアナが私に語っていた。<メルツァーにスーパーヴィジョンを受けてただけど、彼ってどうも早々にセラピイを切り上げさせる傾向があるわよ。だけど私ね、彼にもう終わっていいよーだと言われてからもその後1、2年ほどそのケース続けたの>って…。セラピイの潮時ということだけけど。児童臨床の場合、私の「症例メアリー」などもそうだ。学童期になって学校でのお勉強に気持ちが切り替わってゆく。私はそれをセラピイの潮時と判断したのだが…。メルツァーはそれを支持してくださった。どうやら長々とアナリシスが惰性的に引き伸ばしされることに彼が懐疑的なのは確かだ。いい加減にしろ！と言わんばかりに…。それも、彼がクラインとの分析体験が中断され、彼女の死というかたちで分析再開の希望が奪われたトラーマゆえのアクティング・アウトだとしたら…。事実そうなのかも知れない気もする。或る意味、己の未練を<sup>あざわら</sup>嘲うかのような…。反動形成かしら。であるとしても、アナリシスを受けることで分析患者らの‘主体性’が侵食されてゆくといった彼の危惧の念は無視し得ない。

パーソナル・アナリシスとは、煎じ詰めれば己の‘内なる因縁’の<sup>から</sup>絡み<sup>ほど</sup>合いを解いてゆくことなのだといえよう。フロイトのいうところの「ワーク・スルー」とはその意味。だから、その体験がそれぞれにとって因縁が<sup>ほど</sup>解かれる‘契機’たり得たかどうかということが肝腎要となる。メルツァーの場合だが、彼は末っ子で、かなり年の隔たった姉二人がいたらしい。どうやら彼の誕生時にはすでに母親はかなり高齢だったのではないかと推察される。彼が実母の死をどのように迎えたのかは語られていない。だが時を経て、メルツァーはメラニー・クラインの‘末っ子・分析患者’というわけで、その死を看取る立場にあった。そして彼が後に語るに至った「審美的対象」なるものは遡れば、その老いた母親に対する赤子なる彼の微妙な心遣いが反映されている。対象の<sup>かげ</sup>翳り(衰え)に痛く敏感なのだ。そしてそこに美なる息吹を吹き込み、いのちを蘇らせんと念じた。それが彼の終生の悲願となった。やがてそれは彼の「内的対象」へと引き継がれて…。この意味でクラインとは出会うべくして出会ったのであり、この重なりは偶然ではない。必然だ。そしてこの不思議としか言いようのない巡り合わせが、彼のパーソナル・アナリシスの要諦であり、精神分析家としての彼の真骨頂である。そうであるからして、‘悲’も‘願’も持たず、ただ漫然と‘謎解き’に耽る他の精神分析家たちに違和感を、そして<sup>うなづ</sup>齒噛みするような苛立ちを覚えたとしても、なるほどと頷ける。

そして私の場合だが、私の分析家Miss. Weddellは元看護婦であった。そして私の母親も看護婦であった。マーサ・ハリスはその事実を知らない。ただ当時彼女に時間の空きがあるから、会ってみるよーにと言われた。それだけだったのだ。遠い昔のこと、幼少期に私は母親の長兄宅にしばらく預けら

れたことがあった。そして戻ってきたとき、私は母親の顔を認知しなかったらしい。母親がくちズコがわたしのこと忘れてしまっている・・>と泣いていたと、一歳半年上の姉がその折りのことを証言している。誰にもなかなか容易に愛着しない、懐かない。母親の素朴さそして優しさに折々救われていたはずなのに、ごねまくって、なかなか聞き分けの悪い子ども。それが私だった。後年そうした根っこに蔓延した不信やら疑念を目一杯Miss.Weddellにぶつけることとなった。そして最後にはとことん見限るようにして関係を絶った。シコリを残したまま。この重なりも偶然ではない。必然だろう。やがてそれらすべてを叩き台・踏み台にして、今の私がいる。「贖いの器」へと自らを導かんとして・・。この悲願こそが私の真骨頂と言えなくもない。それもこれも総て、パーソナル・アナリシス後の孤(個)としての私自らの奮闘のもたらしたものの。

ずうっと私は自信が持てなかった。ずっと悩んでいた。それで一つ思い出したことがある。タヴィストウクの同期生でアメリカ出身のキャロラインがいた。彼女の分析家はファースト・クラス・アナリストなんだとか。誰かと思ったら、ハンナ・シーガルであった。そして、キャロラインがいざ児童のセラピー・ケースに取り掛からねばならなくなって、不安でたじろいだ。そのままの心情を分析家に訴えたら、くわたしがいつもあなたにするようにすればいいだけじゃないの・・>と軽く受け流されたんだそうだ。その自信のほどには圧倒される。羨ましいではないか。だが、むしろキャロラインがお気の毒。所詮彼女はハンナ・シーガルではないのだから・・。これを聞いて、ちょっと辛辣なミアナが鼻で笑った。<キャロラインは、ペーパー・ドル(張子人形)ですものね・・>って。いろんなものをペタペタとあっちこちからカット・ペーストするだけ。所詮‘真似っこ’というわけ。ミアナはユーゴスラヴィアからの政治難民であった。かつての祖国でのジャポニズムを懐かしんで、私に言葉を掛けてくれた。お財布にはバンクカードが何枚も挟まれてある、そんな裕福そうな英国人の精神科医と結ばれる前には随分苦労したらしい。ホテルの受付嬢とか・・。だから苦労をまるで知らなそうなキャロラインがお好きじゃなかったみたい。キャロラインの両親は分析医で、カリフォルニアで開業している。羽振り良さそうな・・。彼らがハンナ・シーガルに娘を委ねたのでしょう。分析料金の額については敢えて聞かなかったけど。此の点明らかに、私の分析家Miss.Weddellなどは二流・三流ということになろう。低額料金にしていたいたのだから。勿論ハンナ・シーガルに分析を受けたということなら、それだけで箔が付く。彼女は親の敷いたレールに嬉々として乗っかっていた。赤いポルシェを乗り回していた彼女に何ら不安の影はなかった。でも付き合っている英国人のボーイフレンドが同じ‘宗教’(すなわち精神分析シンパ)ではないという理由で親から反対されているとかで、悩んでいた。その後彼とは別れたらしい。それでも帰国後、早速に親たちが手配したのだろう、幾つか児童のセラピー・ケースに取り掛かったとやら、いかにも順風満帆。ところが、1990年代だったか、私の義兄が画家で、ニューヨークそしてデトロイトで何度か個展をしたことがあり、それで一緒に彼の地を訪れた姉が、精神分析が、かつての栄光は見る陰もなく、とんでもなく斜陽化している実態を聞いてきた。分析家たちに分析患者が来なくなっているんだとか。多くが廃業に追い込まれ、もはやてんでに離散状態なんだとか。<奢る平家は久しからず>、それってほんとうなんだ！精神分析家などというものは所詮潰しの効かないものである。だとしたら、まだ精神分析の‘市場’があるところに居座って、それを‘独占資本化’してゆくことが得策になろう。追い詰められれば、考えることはそこに辿り着くので

はなかろうか。〈寄らば大樹の陰〉というわけだ。ハンナ・シーガルの自信、その強心臓は、自分のところにまだ分析患者が来ているというのが背景にあったはず。それがいつまで続くかなど不安がることはおそくなかったろう。自分のところに患者が来る、そのような仕組み・からくりは万全であつたらうから、わが身は安泰だ。だからメルツァーの提唱する「アトリエ・システム」など目じゃないというわけ。彼女の眼からみれば、所詮メルツァーなどは‘ピエロ役’。洩も引っ掛けない。だが、それはそれとして、ここで思うことは、彼女は一体どういう人間を創ったかということだ。キャロラインがそのいい例ではないか。たかが薄っぺらなペーパー・ドル。親たちの離婚・再婚に付き合わされて、混乱していた過去は過去として、彼女は自らの内で一体誰との因縁を生きてるやらさっぱり分からないでいる。何よりも問題なのは、誰とも因縁を正しく結べない彼女がいるということ。これは心理臨床家として致命的な欠陥である。どうやら結局のところハンナ・シーガルはそこに何ら触りもしなかったふうで…。体制に与<sup>くみ</sup>するということは所詮こんなこと。分析患者といっても、ただ‘消費者’としてカウントされるだけ。虚しかった！ そんなのは要らない、と私は思った。この日本で、どんな組織にも属しないまま、自信のまったくない私がそう思ったのだから、無茶なのだったが…。組織を当てにしない、‘個’として動ける人、それが向こうからやってくるのを私はひたすら待っていた。WEBサイト〈山上千鶴子のホームページ〉の立ち上げの意図もそれであった。そして、分析セッションのなかで、各自それぞれの内に因縁が働いてゆき、それら因縁に生かされてゆくさまをじっくり時間を掛けて待つ次第となった。

私は、訪れるどの方にもその将来を、そしてその身分を保証することはないということを告げる。それを承知の上でお越しの方たちに私は支えられてきた。そして内心常に、これはフェア・ディール(公正取引)かどうかを問うてきた。彼らに対して疚<sup>やま</sup>しいといった思いがまったく無いわけではない。「認定制度」にわが身を担保することをしない彼らの将来はどうなるのか、一抹の不安を抱く。ほんとに彼らは大丈夫だろうか…。だが、答えはない。一つだけあるとしたら、それは人間としてヒューマン(human)であること。それが己の内なる因縁を見据えるなかで育てゆく。そこからおそらく各々がそれぞれなりの業績を積み上げてゆくであろう。そう私は信じている。それが私流の責任の取り方であるとも…。

こうした流れで、ごく自然にMiss.Weddellが間違いなく私の‘反面教師’になっていた。なんだかちよっぴり愉快だ。せつなくも痛みを伴うあれら経験が生かされているという意味で…。あれも無駄ではなかったと思えるから。その一つは、「迷子<sup>まいご</sup>にしない・迷子<sup>まいご</sup>にならない」ということ。私は彼女に随分折々に迷子にされたという恨みがある。それを決して彼女に言っ<sup>ま</sup>ってはいないのだが…。まず最初に面接に訪れたときのこと、住所どおりの家を訪れた。だがどんなに玄関のチャイムを押しても応答がない。痺れを切らした頃、ふと階下に下りる階段があるのに気づいて、もしかしてとそっちへ行くと、それが彼女の住まいであった。つまりベースメントなわけ。私は約束の時間に遅れたことになる。それが面映<sup>しび</sup>かった。こうい<sup>ま</sup>うとき、教えてくれなかったと恨むのは簡単だが、もしかしたら私の状況判断がまずかったからではと自分を責めてしまう。どうして教えてくれなかったのかと相手<sup>あ</sup>を責めることができない。また、その初回の面談後に、或る医師に会いにゆくようにとの指示があった。私はなぜかとは問えなかった。その通りにした。そして間もなくその女医なる方に会ったのだが、どうやら非医師であるMiss.Weddellが担当する

分析患者は分析開始前に予め医師の診断が要するというのがあちらの規定のようだ。形式的な手続きにしろ…。そのように説明されたわけではなかった。推量しただけで…。微かに非医師であるという立場での屈辱感を感じさせられた。にこやかに面談は終わったのだが…。いちいち「なんでどうして？」が頭に残る。Miss.Weddellからご自分について説明があったという記憶は皆無だ。それも不安だったが。マーサ・ハリスのご紹介とあれば、そこに異議を唱えることも難しいわけで。とにかく何がなんだか分からないままに、表面上は実に万事円滑に話が進んでゆき、分析契約の開始に至った。ずうっと後になって、私が分析家の変更を敢えて希望したのには別の理由である。父親が職場で事故に遭い、あやうく失明といったことも危惧されていた折り、私は勿論動転していた。おそらく私がすべてを投げ出して帰国するのではないかと彼女は内心慌てたのであろう。今すぐにでもトレーニングの継続のために援助の確約を両親からもらうようにと私に告げた。その対応に私は逆上した。それをきっかけに、それ迄のさまざまな鬱憤が吹き出たということになる。でも、その当時、私には何かしら自分が‘半人前’だという自覚があった。今ひとつ自分が相手の言うところを正しく把握していないのではないかと、誰にとっても自明なことが私には分かっていないのではないかとといった不安が常に付き纏っていた。だから、皆が知っている。でも自分は知らない。知らない自分が悪いといったことになる。この咎めに苦しんだ。だから、うまく状況が相手に伝えられない。マーサ・ハリスにだって詳細を打ち明けられず、彼女にただくMiss.Weddellにあなたの思いをぶつけなさい…。>と言われて、虚しく黙って引き下がるしかなかった。私の「なんでどうして？」に正しく応えてもらいたかった。それだけなのに…。この‘迷子感’はずうっと引っ掛かっていた。「迷子にならない、迷子にしない」。今やそれを私の心理臨床家として鉄則の一つにしている。自己開示及び情報開示に積極的なのはそのせいである。例えば、私の元に訪れる方々には出来るだけ詳しい道順を伝えることにしている。迷子にならないように…。といったこと。メルツァーの「アトリエ・システム」について、やはり今ひとつ両手を挙げて大賛成とは言い難いとしたら、そうしたこと。迷子にならないかしら、迷子にしないかしらといった不安。つまり私責任持てません！という気持ちからである。

因みに、必要十分な情報を与えずに、それで相手がスツァモンダするのを見て、転移解釈するといった‘悪趣味’など私に持ち合わせがない。それはまったく不必要なことだと思うから。われわれの生きる現実の複雑さ、それをわざわざ‘迷路’にする必要がどこにあるのか。現実的に処理できることにはそのように対処すべきだ。それが心理臨床家としての基本的態度であるというのが私の見解である。メルツァーにしても、単なる夢想家ではない。動く時には動く。手も脚も使って…。例えば、或る日のこと、スーパーヴィジョンの時間に出向くと、なぜか前の人の時間がずれ込んで、そのお蔭で私の時間もずれ込んだ。その後予定していたMiss.Weddellとの分析セッションの時間に間に合わないかと彼が判断してくださって、車を出してきて、私を乗せて自分で運転して彼女の住まいまで送り届けてくれたように…。私は恐縮し、感謝した。このちよつとした振る舞いから、彼の知的誠実(sincerity)が信じられる。世にいうところの分析家とは、残念ながら、得てして「手出し無用、口出し無用」に胡坐をかき、傍観者として直接的な触れ合いをせず、人と極力関わらないといった印象がある。「Sorry(ごめんなさい)」とか「Thank you(ありがとう)」などのごく普通の挨拶ができないといったことも指摘されよう。メルツァーにそんな気取りなど微塵もなかった。誠に‘ヒューマン(人間味溢れる)’であった。

さて、振り返ってつらつら思うに、私は結構無茶をやってきたという思いがある。仕事上の稼ぎの話  
をすれば、辛うじて家計を賄<sup>まかな</sup>える程度。将来設計もまるで無し。年金など当てにするものかと歯牙に  
も掛けずにいたのに、亡き父親がその生前に、‘金銭感覚ゼロ’のわが娘の行く末案じてさまざまに用  
意周到に気配りをしてくれたお蔭で、今やどうにか年金も有難く充分にもらえているわけで。古い支度  
にしてもそう。。昔ながらの「夢みる夢子さん」、そのまんま。どうにも肩身が狭い。組織に属することで  
の縛<sup>しば</sup>り、それも剣呑ではあるけれども、個としての身の危うさも半端ではない。だけれども、こうなるべく  
してなったとしか言いようが無い、それが私なのだから、と。ようやく落ち着きどころを得たともいえる。だ  
が、やはり思う。精神分析との因縁があつてこそそのわが人生なのだけれども、いかにも慎<sup>つつ</sup>ましい。大した  
ことも出来なかった。これで終わるとしたら、私の人生、あつけない！といった感慨が一瞬胸を過ぎた。  
それを人は贅沢と言うかしら。確かに！私の分析家としての仕事は「語らい」と「分かち合い」であつた。  
誰かと一緒に‘協働作業’することの喜び。その中で、それぞれの己の‘殻’が弾<sup>はじ</sup>けてゆく。脱皮とか羽  
化といったこと。そのメタモルフォーゼに目を瞠<sup>みは</sup>る。とことん、偉いなあ、凄いなあと感嘆する。そのように  
して、「あなたが信じられる、そしてわたしが信じられる」、折々にそんな感慨に浸される。この嬉しさは  
何にも代え難い！そんなあれやこれや、メルツァーのこの論文を読みながら、しみじみ思った。

(2019/01/10 記)

\*\*\*\*\*

#### ■補記；

そもそも生まれながらの‘お坊ちゃまクン’のメルツァーに人集め・金集めの苦勞など出来るわけない  
のだ。ラトビア(Latvia)からの移民であつた両親は祖国を捨て、アメリカン・ドリームに生涯を賭けた。  
父親はビジネスマンとして辣腕を振るつたらしい。メルツァーが9歳の折に両親に伴われてヨーロッパ旅  
行に出掛けた頃には、そこそこ財を成していたのであろう。そうした親たちを彼は‘奇跡’と呼んでいる。  
確かに！まさにそのアメリカン・ドリームの‘続き’が彼に託されたに違いなからう。そこには、アメリカでは  
名高い思想家・エマソン提唱するところの「自己信頼(self-reliance)」がうかがわれる。そこでこの‘二  
代目ドリーマー’は、やるっきゃない！何とかなる。。と怖いもの知らずに育つたのであろう。これが彼の  
‘値打ち’でもある。なかなか世間の人さまざまなしがらみに呪縛されていじけてしまい、身動きでき  
ずにいるのが普通だから。だが、夢実現には多くの‘黒子役’を買ってくれる人々の支援が要る。そこ  
で用意周到に根回しすることが求められる。彼に果たしてそれが出来たかどうか。例のピオンの生涯に  
題材を求め、インドの地で映画製作を試み、その‘金喰い虫’の企画があつてなくポシャツタのにも、そ  
れがうかがわれる。事の仔細は詳しくは知らないが、未完成となつた40分程度のその映画(誰の夢の  
切れ端か？！)をYouTubeで観て、こんなものためにマーサ・ハリスが心身を消耗させ、やがて車の  
事故にも繋がり、その寿命を縮めたのかと思えば、まったくのところ許し難い誤算としか言いようがない。  
正直私などは、腹立たしい。わたしたちは迷子にされたじゃないの！その遣り場のない怒りを、メルツァ  
ーに内心ぶつけていた。

さて、ところがである！メルツァーはとことん強運であった。彼の提唱する「アトリエ・システム」だが、その夢想がなんとスペイン・バルセロナの地でしっかりと根付いて花開いているではないか！イギリスでは妄想として疎んじられ退けられた「アトリエ(ワークショップ)」なるものが、彼の地で堂々実現化している！夢が生きて働いているわけだ！その決然たる同志愛で結集された、律儀にして真摯なる自主ワークショップ・バルセロナ精神分析グループ(The Psychoanalytic Group of Barcelona)は、その5年余りに亘るメルツァーとの共同研究の成果として、公開スーパーヴィジョンの記録を編纂し、刊行している。『Psychoanalytic Work with Children and Adults; Melzter in Barcelona – Donald Meltzer with the Psychoanalytical Group of Barcelona and Catharine Mack Smith, Karnak, 2002』が、それである。(因みに、スペイン語版はこれに先立って1995年に出版されている。) その中の「イントロダクション」には、下記のような文が載っている。

\*\*\*\*\*

・・・メルツァーとの出逢いは、われわれグループのそれぞれ誰にとっても極めて刺激的で、実に<sup>みの</sup>禊ある学びの時間でありました。それは、われわれの精神分析のトレーニングにおいて不可欠でした。この学びはまったく終わりのないものといえましょう。それは、かつてフロイトが分析そのものについて「終わりなき分析」と言っておりますように・・・メルツァーについて想起されまことは、その溢れんばかりの豊富な知識だけではありません。実に臨床に対して驚くべき鋭敏な洞察力があり、そして精神分析に忠実であり、臨床素材を巡っての彼の叙述は実に迫真的なものでした。またそれら観察された事柄にさまざまに彼流の連想で色付け・味付けすることにも実に巧みでありました。特筆すべきことはそれだけではありません。彼個人のありようです。その人となり誠意に他者への敬意に溢れていて人間的で、常に自分が誰かに何かを与えられることを大きな喜びとしているふうなものでした。それに科学的な厳密さを重んじていたともいえましょう。そして何よりも重要なことは、臨床例について思索を深めてゆく過程において、彼の語りには真摯な熱情がほとばしり、ごく自然にそうした熱意やら、こまやかな情愛もまた、われわれによく伝わってくるという点で卓越したものがあったということです。同様に印象深いことは、そうした場合に、彼が患者それぞれの生命力および成長への意欲に深く信頼を寄せているといったことが実にありありと私どもにも伝わってくるといったことなものでした。・・・ (訳; 山上)

\*\*\*\*\*

ブラボーではないか！この刊行物には、明らかにメルツァーの醸し出す独特の‘熱情’が、その息吹が偲ばれる。おおーっ！と思う。その熱気のかなで、参加者一人ひとりの心の内にさらなる‘夢想’が<sup>はら</sup>孕んでゆくこととなろう。あらまあ、やっぱり‘夢’は見るものだわねえ、と私は一人呟いた。妄想と<sup>そし</sup>誹られようと<sup>あざけ</sup>嘲られようと・・・ かつてキング牧師が<I have a dream(私には夢がある)・・・>と語った。誰もが首を傾げ、まさか、あり得ないと鼻であしらった。それが、時を経て、今では何でもないごく当たり前の日常風景になっているように・・・ さて、ここから私はどんな夢を見るのやら・・・そして、あなたもまたどんな夢を見るかしら・・・！？ (2019/01/10 記)